

---

# 快適ハイテンション囃子

光差す海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

快適ハイテンション離子

### 【Nコード】

N4980F

### 【作者名】

光差す海

### 【あらすじ】

フリーターで自由気ままに自堕落に生きる明弘の非日常的日常。ライブハウスで働く明弘には、毎日のように面白可笑しく痛い出来事が……。芥川賞作家の某町田氏の作風のオマージュです。

俺、今日も真面目にバイトに行く。バイトつつつても時給は安いし仕事も殆ど無い、遊びに行くようなもんだ。四戸原にある薄汚いライブハウス「Solid」って名前だけは一丁前で、中は音響から機材から防音まで悲しいほど適当。だから隣の「三貫楼」つつー中国人がやってる中華料理屋の親父が音漏れにイラついて、しょっちゅう苦情を言いに来るけど、あんま日本語が覚束ないから何言ってるかわからねえ。俺が受付の時に入ってくると、俺みたいなチンピラ小僧じゃ話にならないと思ってるらしく、すぐにオーナーを呼べとか言う。けど、そのオーナーの発音がどう聞いても「オナ」なので、オナはいません、って言ったらブツブツ言った後唾を吐いて帰っていく。でもまあ気持ちはわかる。音楽なんざさほど興味のな俺が聞いてても、騒音以外の何ものでもないようなバンドがわんさかいやがる。お前ら音がかけりや何でもいいと思ってるんだろ、としか思えん。でもってそんなバンドに限ってバカなおギャルとかモヒカンのシャブ中くせえのが首振り回して飛んで跳ねて狭い中を暴れまわりやがるから始末に終えない。いや、暴れるのは勝手だけど、俺が客にドリンクを持っていく時に当たられて、それがこぼれた日には殺意を覚える。大体てめえ未成年じゃねえのかチビ。俺は二十一だぞ。えへん。

で、その手の連中はステージが終わってもなかなか帰らない。掃除出来ないだろうが、さっさと帰れ。店の前にたむろするな。タバコをポイ捨てるな。後で掃除するのはこの俺だ。前を通るギャングみたいなのとにらみ合うなモヒカン。案の定乱闘勃発。クズ同士どうせなら殺しあつてこの世から消えてくれてよい、俺様が許可する。と、せっかく俺が世のため人のためを思ってお墨付きを出したのに、県警出動ですか。うひょー、今宵のオマワリは血に飢えてい

る、ですか。警棒でチンピラを殴る、掴んで倒して押し付ける、あつ、あの若いの見えないように腹蹴ってる。そちも悪よのう。モヒカンは髪の毛を掴んで引きずり回されて半狂乱で訳の分からない事を吠えている。クスリで逝ってるからしょうがない。ははは。合計五名の社会の産業廃棄物がめでたく三十名ほどの警察と言う名の暴力集団に取り押さえられ収監されていきました、とさ。

と、思ったらこの俺のところにオマワリがやってきて、事情を聞かせてくれたか言われても、相手をする気は全く起こらず、そんなの知らんよ、知らん知らないつす、と店内に逃げ、まだ残ってる客に閉店時間ですのーとか声かけてカウンターの氷とか片付けてとつと帰宅。眠いんだよこっちは。ボロボロのJOGにまたがって急発進。たった一つの星すら見えない横須蚊の夜道は運転しにくいなのなんの。不思議な事に街灯が片端から停電してやがる。はーん、俺を事故らそうという国家規模の陰謀かよ。その手には乗らず、無事帰宅。最近ハマってるのはSNS。チャット機能を駆使し、俺は今一人の女を口説いてる。ユキとか言うプー。なにもしたくないーいが口癖のバカ女。さっさと食っちゃいたいんだが、飯は驕りじゃないと駄目らしい。で、俺、今日、給料日だった。さて、約束をとり返る。

Akihhiro 俺給料しこたま入ったから開いてる日に会おうや  
Yuki えー、なんで。外出るの面倒くさいし

Akihhiro 家にいてもつままないしょ 飲みいくべ

Yuki はー、おごってくれんの？

Akihhiro もちろん

Yuki じゃまあいいよ、でもHとかないからね

このアマ、と思ったが口には出さず、さっさと場所と日取りを決めた。つうか明日だ。俺様は彼女すらいないので溜まり放題なんだ

よ。目的はセクロスに決まってるだろうが。

翌日、夜の十八時に一張羅のヒスグラのＴシャツにナンバーテンのジーンズでがつつりと決めた俺はプーのユキを待った。顔は写メ交換してるから知ってる。十八歳らしいからまさに食べごろ。グヘヘ。なんて思ってたらよだれが出てきて、隣に立っていたOL風の女に見られやしなかったらうな、なんて思いながら駅前のロータリーでマルボ口をふかしているとユキが来た。うわっ、思ったよりデブいな。まあいいか、顔は好みだ、とさっさと割り切って居酒屋で飲んで食わせ、最近ユキが読んだと言うどうでもいい小説の話聞き、カラオケに行つてテケトーにヒットチャートの上位曲でも歌ったらユキはうっとりしてやがる。俺のとりえはそれなりに歌がうまいことだ。その癖音楽には興味が持てない。何を聞いてもカスにしか聞こえん。カラオケは女を口説く為に来る。まんまとユキとラブホにしけこむ事に成功した。そして行為に及ぶ。よく濡れるが少々クサマンだな、まあいいか、とばかりに華麗に中出し。中出しこそ男の華。ふはは。

なんて悦に入ってたなら次の日携帯にユキの彼氏とやらから電話がかかってきた。とりあえずお前殺すから、携帯から住所割り出して行くから、とか言ってる。いやいや、俺はまだ殺されるわけにはいかないんで、とか言っていると、俺はナントカ会の幹部を知っているとか、バツクのヤクザ屋さんの名前を出してくる。こりゃー謝つても無駄っぽい。どうしよ、と思索していると、誠意を見せれば許すとか言い出す。カネか、いくらですか、と言うと、二十万円とか言う。はい無理。もう無視。この手のは語りのチンピラに決まってる。俺の本能はそう告げている、と決め、ガチャ切りをして、九月の晴天を駆け抜け、ボロJOGに飛び乗り、ツレのやつてる古着屋に転がり込む。アイジという名の俺のツレはオヤジがそっち系の人で、いざとなったら頼りになる、と俺は思っているので、早速事情を話

しておいた。アイジはほつといていいぜそんなの、と笑いながら店内の掃除をしている。俺のツレの癖に妙に真面目だ。オヤジさんは見たままミナミの帝王だからかえってしっかりしたのかも知れん。さらに、無職のタツイチがやってきた。今日もスロットで二万もすったぜ、アヒヤヒヤと絶望的に笑う。コイツ泣いてるだろ、と思っただ。アイジの店は真面目さの賜物が繁盛してる。俺ら、はつきり言っただ邪魔。でもアイジはそんな類の事は一切言わない。俺とタツイチ、昼飯を食いに行くと言って店を出た。

「俺、もうカネねーべ。」

とタツイチが鼻を膨らませて言う。まさかコイツ俺に奢れってんじゃないだろうな。俺、昨日の顛末を細かく話し、

「と言う事で俺もあんまない。」

と言っただ、断固奢らないという決意を表明した。タツイチは舌打ちをした。と、前からひ弱そうな高校生がやってくる。

「いいぞ、アイツに小遣いもらうべ。」

タツイチはそう言うのとポケットからバタフライナイフを取り出す。あーこわ。そんなもんで刺したら死ぬぞ、と思っただら真面目に学生服を着込んだ、気分が悪くて早退しましたという雰囲気のお兄ちゃんに声をかけ、狭い路地裏に連れて行く。俺、どうでもいいけど一応ついていく。タツイチはオマワリ見張ってて、と言っただが、どうも時既に遅し、入り口の所から合法暴力集団の構成員二名様が小走りやってきました。俺とタツイチ、高校生を押しつけ、全力で路地裏の向こう側へ走る。行き止まりの壁を、そこらにあったゴミ箱を台にしてよじ登る。飛び降りた民家にブルドック。お約束にもほどがある。日頃の運動不足もなんのその、とにかく走る走る。若いつて凄いな。取り合えず警察の追撃を逃れ、空き地の隅で隠れて休憩。

俺、取り合えず暇なんでタツイチと二人、程よく仲いいリサのア

パートに行った。まだ昼過ぎなので家にいた。キャバ嬢だからこの時間にはいつもいる。だが、決してやらせてくれない。腹の立つ奴だ。一回下着を盗んでヤフオクに出したらなぜかばれて包丁で刺されそうになった。その癖、俺らが銭が無いと言うと飯だけは食わせてくれる。趣味が料理らしい。

「リサさんの天下一のうどんを食わせてください。」

「あんた最近何してんの。タツイチはどうせパチプロだろーけどお。」

「最近は何もする暇がないので司法の勉強に勤しんでおります。」

「ふうん、もう一秒でも早く死んだほうがいいねお前。」

そう言いながらリサは台所に向かう。俺とタツイチ、ボケーツと狭い居間の隅でタバコを吸ってテレビを見る。ピンク基調の部屋はいつ来ても落ち着かんわ。なんて言っていると本当に皿うどんが出てくる。俺ら、もりもり食う。至福の時。リサは鏡に向かって工事じやなくて化粧をしている。すっぴんを知る身には恋愛対象足りえないが、これでも店では相当人気らしい。俺の携帯が鳴る。名前は昨日中出しかましたユキ。えらいこっちゃ。どうしよ、出るべきか。タツイチが出ないの？とか言う。結局、出ることにした。出ながら玄関を出る。

「・・・もしもし。」

「阿矩津会の田中と言う者だが。」

はいさっきのヤクザ屋さん。語りはいらん。

「はいはい、語りですか。」

「語りだあ？いい度胸してんな、何々県横須蚊市谷画原山通り 丁目何番地にお住まいの吉見明弘くん。」

ガン。住所から本名まで全部ばれてるじゃん。血の気が引いて震えだす俺。

「お前な、うちの若い衆の女に手出してただですむとでも？」

「し、知らなかったんです。」

敬語になる俺。家とかに来られたら洒落にならん。

「詫び料五十万用意すれば勘弁してやるからよ。」

さつきより増えてる、と思いながら、貧乏フリーターなんで金ないす、と言うと親がいるだろうが、親に出させる、と言う。親は死んでも出してくれませんか、今でも棄民状態で完全に見捨てられてるんす、と半泣きになっていった。事実だからだ。

「・・・しょうがねえな、お前、うちで仕事しろ。五十万分働いたら勘弁してやる。」

「何の、仕事で、すか。」

と聞くと、取り合えず今から事務所に来い、と言う。怖くて仕方がないが、家の住所まで知られていて、万一家に電話でもされたら、俺、ヤクザじゃなくて親に殺される。アイジに電話で相談したら、ま、行ってみろ、殺されやしないだろ、と言うので行ってみることにした。

言われた事務所に言ってみると、こじんまりとしているがまごうかたなき組事務所である。調度品がなんでも恐ろしい。特に壁にかけてある日本刀と牛の顔とか超怖い。俺を呼び出した田中も超こええ。オールバックで、右目の眉毛の上辺りから何かで切りつけられたかの様な跡がある。特殊メイクじゃないよな当然。

「お前、オレオレ詐欺しろ。んで、五十万円集めたら勘弁してやつから。気に入ったら毎日してもいいんだぜ。」

と、ドコモの携帯を渡しながら言う。誰が気に入るかそんなの。そもそもやり方がわからん、と思っっていると

「そつちにいる奴らにやり方聞け。存外簡単だぞ。焦る演技しろ。」  
と言うて、一個の携帯とA4の紙一枚を手渡してきた。注意事項とかまとめてある。ヤクザの癖に親切だな。で、そつちと言うか隣のドアの開いた部屋に入ると、五人ぐらいのチンピラっぽいのが絨毯に座り込んで、全員携帯と電話帳片手になにやら電話している。

受話口にハンカチを巻いているのは声をくぐもらせるためか？口調だけの演技は難しいらしく、全員困ったような顔になってるのが受

ける。電話で上司に謝って頭を下げる

ヒラ社員のように面白いわー、とか思っていると、一人が舌打ちして電話を切った。やり方がわからないので教わる。

「俺もこの仕事するんすけど、どうすればいいですか。」

「ああ、片端からかけて、とにかくカネを振り込ませるんだよ。交通事故に遭って百万ぐらい現金が

大至急いるって俺は言ってるけど、適当に好きな名目考えたらいいんじゃない？」

言われて、少し考える。どう言ったら年寄りババアを騙せるか、と言う話だ。口からでまかせはお手の物だ。電話帳からランダムに番号を選んでかける。真昼間だからたいして主婦が出るだろう。

「・・・はい、吉仲でございます。」

あれっ、思ったより若いのが出たな。若妻か。どうしょ。一応やるか。

「ああ、俺だよ、ケイタ。お母さん、まずいことになったよ。」

「・・・はい？どちら様ですか？」

「だから、弟のケイタ。」

「私には弟はいません。間違い電話ではないですか？」

はい駄目、次。大体若すぎた。もうろく寸前のババアがいいな。

「はい、武藤と申します。」

なんでオッサンが出るんだよ。死ね。

「もしもし、国見でございます。」

きた、ババアだ。これは六十歳ぐらいのはず。

「母さん、オレオレ、俺なんだけど。」

「ああ、伸介かい。元気にしてるかい。単身赴任はどうだい？」

しめしめ、あっさり信じてやがる。行くぜ！

「ああ、それはいいんだけど、母さん、実は大変なことになってさ、交通事故を起こしてさ。」

「はいはい、オレオレ詐欺ですか。さようなら。」

なんてメディアアリテラシーの高いババアだ。五秒と経たず見抜か

れるとは。俺、その調子で一日中赤の他人に電話しまくり。成果0。周りのチンピラも一人は成功してたみたいだけど、肝心の振込先をババアが間違えたみたいで、銀行口座に確認に行っても入ってなかったそうだ。で、もっかい電話したら、もう振り込む金がないとの事。おめでとうございました。もう帰る。オールバック右目傷跡のヤクザは特段何も言わず、明日も来てやれ、とだけ言って帰してくれた。

家、オヤジは羽振りのいいラブホ経営者。家にいるときはまずない。二号妾の家がお気に入りらしい。お袋もセレブ気取りでやれテニスだ茶道だ旅行だで家族の事なんて顧みないし俺のことが大嫌い。兄貴だけは真面目で、地方の医学部か何かに行ってて家にはいない。実質家にいるの俺だけ、ははは。週に三回家政婦が来て家事してるけど、俺のことをゴミみたいな目で見る。事実そうんだけど、機会があれば焼却炉で燃やしてやるぐらいの事は考えてそうだけ。何か頼んでも返事もしない。クソツ。俺、何もやる気出せず高校卒業後プラプラ。その内オヤジの会社で何かすればいいぐらいにしか思っていない。

俺、毎日取り合えずヤクザの事務所でオレオレ詐欺に勤しんでた。四日目、ただなら電話していると、突然、本当に突然何発かの銃声があった。いや、さすがの俺も銃の音なんかリアルで聞いた事はなかったけど、映画とかドラマで聞いたままの音がしたわけ。周りのチンピラのうち、一番しつかりしてそうなのが飛び出す。また銃声。ありえん。硬直して固まっていると、突如、二人の黒スーツが中を覗いた。何かを見定めた後、消えた。一同、生きた心地も無く、しばし石像化。一人がボソツと

「カ・カチコミか。」

と呟いた。それなんて仁義無き戦い？なんて、俺、内心くすつと笑った。静寂が室内を包んでどれくらい経ったか、今度はサイレン

の音が響いた。近所の住人が通報したらしい。やべつ、合法暴力集団とは関わりたくねえ。俺、いの一番に部屋を飛び出した。足元のさっきのチンピラ、向こうのソファアに一人、デスクの前でオールバック右目傷跡が胸から血を吹いて倒れている。ナンマングラブ、と足元が震えるのをこらえながら玄関を飛び出す。ここにいるのがばれたらオマワリになんて言えばいいんだよ。美人局のカタにオレオレ詐欺してましたなんて言ったら人生が終わる。俺の逃げ足は三國一、無事、街に溶け込む事に成功。まあこれでヤクザも死んだし、借金もチャラってもんだ。はははっ。俺の足取りは軽い。

俺、相変わらずSOLIDでバイト生活。夕方から入って、0時ぐらいまで働く。今日も腐れパンカードもが吠えて暴れてただひたすらにうるさい。全員まとめて東京湾に沈めるのが日本の未来のためだ、なんて思ってたら客同士がケンカを始めた。店長、苦虫を噛み潰した顔で俺を顎でしゃくる。はいはい、止めればいいんですよ。ドリンクカウンターから出て仲裁に入る。入った瞬間左頬に衝撃。俺、なんで最近バイオレンスなんだろ、と思いながら仲裁を続ける。やっとおさまった。顎が痛い。割りにあわねえバイトだぜホント。店の奥でブツブツ言いながらタバコ吸っていると、バイト仲間のケンが災難だったな、とか言いながら寄ってくる。コイツはアップ系のクスリやってる馬鹿だから関わりたくない、と思っていたのに、帰りに一緒にバーへ飲みに行く事になった。で、そこで二杯ぐらい飲んでると、新しい客が入ってきた。ケンはおもむろにカバンから箱を出してそつとカウンターの下から渡す。ヤクの売人なの？と聞くと、そうだよつとニヤリと笑う。このなんともいえない甘つたるい匂いはなんだ。とつとトラックにでも轢かれて死ぬ、と俺は思った。なぜか知らないがクスリをやる奴は大嫌いだ。クズにも節度がある、と言う事だけは、俺は知っている。ところが今宵はこのクズは寂しいのか知らんが俺を返さない。踊るほうのクラブに行こうつてんでしぶしぶついて行くと、0時を回ってても人は山盛り踊っ

てる。大音響には慣れていりつもりでも、ハウス系つかダンス系はまた違う。生ビール二杯ほど注ぎ込んで、なんでもいいから踊りだした。ケンはどうか行っちゃった。気がつけば、目の前で露出の多い服装のギャルが腰を振っている。急激に性欲がもたげてきやがった。早速・・・と思ったが、とっさに美人局のユキを思い出した。調子こいてラブホに行ったらまあ怖い人が後ろから出てくるやもしれん。学習した俺は、取り合えず話すことにした。手を引いてテーブルのところを誘って四方山話をする。誰と来たの、いつ帰るの、別にオールでいい、友達と来た、あつちで踊ってる、私はサヤカ、二十歳、などなど。んじゃあ友達に声かけてきなよ、二人でどつか飲み行こうぜ、と言うとあっさりOKが出る。はん、簡単なもんだな。一応ケンを探したが、さっぱり見当たらないし、連絡先も知らないので放置する事にして、サヤカと消える事にした。

目的が一致してるので展開のはやいのなんの。翌朝、俺とサヤカはラブホ「ドリームシアター」から出てきた。聞いてみたら大学生らしく、親はなんと市会議員らしい。おいおい、娘の教育がなっていないぜ、とか思った。顔立ちは愛嬌のある感じで、妙に色白だ。しかもなぜか俺のようなゴミに入ったらしい。俺も気に入ったので付き合うことにした。俺、瓢箪から駒で彼女ゲット成功。で、サヤカを家に帰して、俺も帰る。二度寝して、また夕方からSOLEDに行った。ケンがいた。

「昨日勝手に帰っちゃっただろ。」

と憤慨している。知らんがな。そっちがいなくなっただ、と言いき張って誤魔化す。まだ不満そうだが無視。携帯にメールが来た。サヤカからだ。次いつ会える?とか聞いてくるからいつでも、俺、ただのフリーターだし。と返すと、明日、会いたいとの事。はいな、と返し、今宵も愚にもつかない駄音を垂れ流すスカバンドの音を聞いた。

サヤカと仲睦まじく青春を謳歌している俺だが、なんだかどんどんおかしな方向に向かいだした。ある日、お父さんに紹介したいとかわれた。なるほど、会うべきだな、と納得したもののあんま気が進まない。けど、本人がせがむのである日、家に行った。思った以上に豪邸で、ボロジーンズで来た事を後悔した。が、お父さんと会って話を聞いたらもっと後悔した。

「ところで、キミに一つ頼みごとがあるんだが。」

と、改まって恭しく言う。なんでしようか、と聞くと、

「仔細は問わず、運んで欲しい物があるんだ。」

なんじゃいな、と思つて問うと、トランク一個のある場所に届けて欲しいとの事。アシはあるか、と聞かれて原付なら、と言つと、まあそれでもいい、大して大きくはないんだ、とか言う。横のアカ力の雰囲気でも察しても断れそうもない。まあそれぐらいなら、と引き受けると、市議員のお父さんは大いに喜んで、早速と言つて消えたかと思つと、それなりの大きさのトランクを持ってくる。

「中身は聞かないで欲しい。ただの書類なんだけどね。」

全然信用できん。それこそへロインでも入つてんじゃないか。とは顔に出さず、場所を尋ねる。

「陽州街道をずっと走つた山奥の一軒家なんだ。」

と、地図を渡された。横のお母さんも一安心みたいな顔をしてやる。一体なんなのか。鍵は当然かかつてんだらな。考えたつてわからないので、さつさと実行する。では、と三人に挨拶し、よっこらしよとトランクを持ち上げて去る。あんまり重くないけど、何が中身だろうな・・・と考えるでもなしに目的地にJOGを走らせていると、いやに煽られる。煽ると言うかぴったりついてくる黒のシーマがある。なんだなんだ？取り合えず、不気味なので目に付いたコンビニの駐車場に止める。シーマは行き過ぎた。ふう、気のせいかと再び発進した。すると、またどこからか沸いてきて後をつけてくる。チツ、しょうがねえな。四車線ある幹線道路で、道交法違反のウターンをかましてやった。原付でなくばこの芸当は出来まい。は

ははっ、バカめが、と思っていたら、後ろのほうでサイレンが聞こえる。最悪だ。

「前の原付、止まりなさい。逃げられないぞ、止まりなさい。」  
ファンファン言わせながら追いつてくる。このところは乱闘と、それに伴う合法暴力集団さんと縁がありすぎる。もう勘弁して俺が何をしたと言っのさ。ちゃんと働いて遊んでるだけじゃないの。俺、ちょっと涙目になりながら逃げる。小さな一車線にどんどん入り込む。一方通行はないか。あった。余裕で侵入する。ナンバープレートを確認されていませんように。

取り合えず、警察を巻いたので路地で一服する。さっきのシーマといいなんなんだ。これが目的なんだろうか。と、トランクを足でつつく。逆走したから、目的地が遠くなっちゃったぞ。出来れば迂回して遠回りするべきだろう。あーめんどくさ。小遣いでももらわにゃ割りに合わん。と、向こうの四つ角から、見覚えのある黒いシーマがやってくる。俺、金玉縮みあげてまた爆走開始。あのフルスモークが堅気的車だとは思えない。縫うように乗用車を追い抜き、ともかく目的地へ向かう。トランクさせ預けちまえば後は俺は狙われまい。コイツが目的だろうから。陽州街道に乗った。あと少しだ、と言っところでまた県警様のパトカーに見つかりました。奴らの執念を見た。

「前の原付！スピード違反だぞ。止めて左に寄りなさい！」

口調も荒くなってるし。罰金+こつてり絞られる。どうしよう、ともかく逃げる。今のところ4車両ぐらいい間にいるから、まだナンバーは読まれてないだろう。俺、今人生の中で一番必死。あ、この辺だ。横道にノーブレーキで入る。タイヤが鮮烈な悲鳴を上げたのがわかった。まずい、坂道になる。案の定パトカーはついてくる。馬力の差で捕まる。終わった。

と、サイレンの音が次第に遠のく。何故だ？止まったのか？後ろ

を振り返る余裕はない。らせん状の坂を走っていくと、さつき通った道が見下せる場所に来た。あつ、パトカーの野郎、飛び出たキツネか何かを轢いたんだ……。テララツキー！地図を思い出し、速度を落とし、目指す一軒家を発見……。げえつ。目的地と思われる民家の前に、黒のシーマでござい。ドアが開き、二人飛び出してきた。これも正真正銘のヤクザ屋さんじゃありませんか。慌てて反対へ全力疾走。黒のシーマも発進した模様。タイヤがガクガクしてきた。ミラーを見て、さすがに震えだした。シーマのやつ、一切遠慮しない。追突してでも止める気だ。さっきの街道へ逆戻りしていく……。いけねっ！あつちにはパトカーがいるんだ！思った瞬間ブレーキをきつく抑えてしまい、俺、勢いでガードレールにぶつかって、体が跳ね飛んだのがわかった。ゴロンゴロンと体が転がるのがわかる。死ぬほど痛い、と言う感覚を最後に、意識を失った。トランクの鍵が壊れてバカッと開き、中から札束が飛び出して舞った。

#### 毎朝新聞 Headline ニュース

民自党市会議員贈賄発覚 朝野夜雄議員逮捕

昨日昼過ぎ、横波間県横須蚊市在住の横須蚊市会議員の朝野夜雄  
容疑者が、

鹿嶋建設役員の工事兼留男宅へ現金を運ばせていたところを、調査  
中であつた横浜県警が

発見し、確保し、後、両名を贈収賄の容疑で逮捕した。朝野議員は  
「身に覚えのないことで

逮捕は理解できない。」としている。県警の調査によると、朝野議  
員は横須蚊市発注の

橋梁工事の談合の見返りに、票確保の為に鹿嶋建設へ現金を贈賄し  
たと見られている。

俺、今病院。あばらが二本折れて二週間は安静との事。警察には事情聴取された。と言うか

俺を助けたのは警察。俺を追っかけまわしたシーマも警察だそう。どうも、俺の怪我には

責任があると言う話らしく、司法取引っての？その代わり運び屋をやっていたのは、中身も

知らなかったと言う事で、法的責任は今回はなしとの事。とほほだぜ。看護師のお姉ちゃんが来た。

かなりタイプだからコイツでも口説くか。どうせサヤカとはおしまいだ。こうして、俺の面白おかしい

祭り囃子は続くてもんだ。今日はもう寝る。Your fate will awake before long, too. っ

てか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4980f/>

---

快適ハイテンション囃子

2010年12月8日02時04分発行